

明治の日本における女性と女性の中高等教育

“日本の女性の社会的地位を向上させるために”¹

コリン・スロス
Colin Sloss

最初に日本にやって来たのはカソリックの宣教師たちであったが、明治維新以後になって来日したプロテスタントの宣教師たちが日本をプロテスタントの“文明化という”恩恵を与える必要のある国であると見なした。また日本の改革者たち、特に元武士階級の人々は、彼らが西洋文化の賜物であると感じたものはしばしば積極的に受容に努めた。キリスト教長老派の教育者で1870年代初頭に福井で暮らしていた、ウィリアム・エリオット・グリフィスは、**帝の帝国**を著して強い影響力を持っていた。彼はこの“文明化という”影響力の熱心な提唱者であった。1871年4月10日付の妹への手紙のなかで、彼は、自分と友人が日本のある重要な指導者にこれらの恩恵をどのように列挙して示したかを述べている。

“…私は彼に言った。我々のすばらしい国は無料の教育機関や無料の公共施設を持ち、そこでは労働は恥ではなく、行政官の長の出自は一般の人間であり、女性も男性と同様高い教育を受けている。我々は彼らに言った。日本は決してすばらしい国にはならない。もし労働を軽視し、特権階級を働かせず、女性を教育せず、一般の人々の社会的地位を高めようとせず、かれらに十分な配慮をしないのであれば。”²

グリフィスの日本女性の教育への関心は、日本についての彼の著作の変わらぬテーマとなった。これはまた当時、日本で活動していた他のプロテスタント宣教師とも軌を一にするものであった。実際、日本の女性の地位に関しては、グリフィスは楽観的であった。：

“すべての他のアジアの国々と比べると、日本は女性への尊敬や崇敬については屈指の国であると信じている。インド、ビルマ、中国に滞在して日本にやって来た外国人は、日本人が大きな尊敬と気配りを女性に与えているのを見て、おどろきかつ喜んだ。”³

さらにまたグリフィスは考えている。個人的な美德という点に関しても、“日本の女性は最も純粋なクリスチャンの女性と劣らぬほど純粋である。”⁴

しかしグリフィスは一つの致命的な欠点を見出してい

た。それは伝統的な儒教文化のもとで求められている“子としての親への従順さ”である。日本の女性は“父親の命令があれば明日にでも、遊郭に入り、生涯苦界に身を沈めてしまう。一言も彼女の口から苦言がでることはないだろう。子供として従順に親の言うことを聞かねばならないのだから。”⁵

自分の嫌いな人生や、病気や、早く訪れる老年や、若死も彼女は喜んで受け入れる。”⁵

明治期の女性を観察した他のヨーロッパの観察者も同様な関心をよせている。アリス・ベーコンは「日本の少女と女性」という彼女の著作の中で、自分の観察した文化的な差異を要約して述べている。同時に彼女が文化的相対性という概念を理解しているということを暗示している。

“我々にとって高潔な女性とは、肝が据わっていて、勇敢で、利己的でなく、自己犠牲的な女性を意味するのではない。単に個人的な不名誉を蒙っていない人をいうのである。純潔は女性の最高の美德である。：それに比べればどのような美德であろうと二次的なものでしかない。これは我々の物の見方である。そして、そのような物の見方の全体は、その美德を前面において配置されているのだ。しばらくの間これを脇において、日本女性の道德教育について考えてみよう。ほんの幼いときから成年に達するまで、彼女は絶え間なく教え込まれる。服従と忠誠が最高の美德であると、それらは他のすべてのより重要性の低い美德を犠牲にしてでも守られねばならない。”⁶

もちろんここで我々はグリフィスとベーコンがアメリカのプロテスタントの理想と高貴な、武士階級の日本の理想を比べているのがわかる。さらに彼らは両方の文化に対するそのような理想の影響について一般化しすぎていた。

当時日本にいた‘文明化された’外国人の行動についての報告を考慮にいれると彼らは、この好ましからざる現実気がついていたに違いない。たとえばグリフィスは妹への手紙のなかで、“福井の同僚の外国人が“99%の他の外

国人と同様に”⁷土地の娘と暮らしていると述べている。グリフィスについて書いているローゼンストーンは当時横浜が日本にやってくる外国人たちの主な上陸港であるといっている。“ほとんどのヨーロッパ人は教会に通っていない。かなり多くの外国人が地元住民にたいして経済的な優位性で相対している。そして一部はもっとも非キリスト教的な残酷さを持って振る舞い、地元の使用人たちに叩く、蹴る、そして冒涇するなどの行為をはたしている。しかし、さらに悪いのは兵士や水夫や流れ者たちの行動である。かれらは横浜のBloodTownと呼ばれた地区の酒屋や安酒場で、飲み騒ぎ、ギャンブルに明け暮れている。

これに同市の宮崎町に集まる旅行者や土地の愛人とおおびらに暮らしている外国人をくわえれば、人は西洋の存在が必ずしも良いとは言えぬ曖昧さと、暗い影をもった漸進的な変化の光とに彩られているという、困惑するような思いに駆られるであろう。”⁸

ここでとりあげられている日本女性の理想像は江戸時代(1600-1868)にさかのぼるということを指摘するのはまた重要である。さらに具体的に言えば、それは1672年に出版された女大学(女性のための高等教育)のなかで女性の役割として定義されているのだ。女大学は儒教の教えを述べたものであり、“女性は特定の君主を持つことはなく、自分の夫を君主として考え、深い崇敬と尊敬の念を持って夫に仕えねばならず、決して夫を軽蔑したり軽く考えてはならない。女性の生涯を通じての義務は服従でなくてはならないのだ。”⁹

最近一部の日本の歴史家が指摘していることだが、“「女大学」の閲覧は文字の読める支配階層に限られており、一般の平民階級は、これとは違って、伴侶を選ぶにあたって、貞淑と純潔にはあまり重要性を置いていなかった。一般的な見方とは違って、日本人の女らしさというものは近代に作られたものであって、全く伝統的なものではないのである。”^{10, 11}このようなことは多くの日本人男性にとって自然なことであったであろう。

“なぜ(西洋では)かawaii女が自分を主張し、男がその尊大な態度に譲歩をしなくてはならないのかという問題は、当時の日本人男性にとって理解できないことであつたろうし、今でさえも多くの日本人男性は理解できないだろう。”¹²

日本女性のモラルに関するかれらの心配はかなり誇張されたものではあつたろうが、女性の忍従という儒教的

な伝統から日本女性を「救い出す」という宣教師たちの努力は、日本の女性のための進んだ教育を導入するというかれらの使命のおおいなる動機となった。それゆえ、彼らは明治の初めに多くの女性のための学校を設立したのである。宣教師たちに関して、そのような学校の不可欠な点のひとつは、それらが寄宿舎学校であつたということである。

これらの学校の多くは1837年にMary Lyonによって設立され、その後プロテスタントのミッションスクールのモデルとなったthe Mount Holyoke Female Seminaryをモデルにしていた。そのような寄宿舎学校は、理想的なキリスト教の家庭を目途したものであり、そのような”家庭“は日本の女性たちを日本の家庭つまり”家““という悪しきものから救うものと期待された。

“アメリカの宣教師たちは信じていた。日本の家族は女性にとって危険なものであると：つまり、家族は有害な社会的行動基準を繰り返し教え込み、女性の精神的、知的教育のより高い面を無視しているのだ。大部分の明治時代の宣教師たちが急務であると考えていたのは日本女性たちを家庭でうけている儒教の教えから解き放つことであつた。できるならいつでも、アメリカの女性宣教師たちは日本の女性と彼らの家庭に楔を打ち込むために寄宿舎学校を設立することによって学校での教育を行つたのだ。その寄宿舎学校では日本の女性たちは日本の伝統的家族制度の陰湿な影響から逃れることができたのである。”¹³

宣教師たちが熱心に若い女性のための教育を始めたと同じ時期に、女性教育の分野で—特に、中等教育の分野で—一種の真空状態があらわれた。明治政府は熱心に男女共学の初等教育システムを作り出した。しかし、全国に十分な校舎を建設したり、高い就学率を達成するには時間が必要だった。中等学校の設立に努力がむけられるのはもっとあとになってからである。当初は、男子ための学校のみが目的とされた。

“中等学校は男子だけのものであるというのが、明治期にはあたりまえに受け入れられた前提であつた。初等教育を終えれば、男女の教育の必要性は異なるというのが、伝統であり、人々の心に深く根ざした考えかたであつた。少女たちは家庭の主婦となるように運命づけられていた。初めから、男女別の教育制度が計画されており、上流階級の女性たちでさえ、高等教育につながるような教育を受けることは出来なかった。”¹⁴

それにもかかわらず、女性のための中等教育への要求

は存在した。それは特にかつての武士階級の家族からのものであった。そして、ミッションスクールが答えたのはこの人々の要求であった。さらに実利主義的な明治の指導者たちはよろこんで宣教師たちに、金沢のような、かつては外国人に閉ざされていた地域に住むことを許した。かれらが排他的なキリスト教の宣教師としてではなく、教師としてかの地に赴くという条件のもとで。

もちろん、キリスト教に対する激しい敵意は存在した。郡山源四郎は回想している。“近代初期の日本では、キリスト教は“耶蘇”という侮蔑的な名称を与えられており、その信奉者たちは憎まれ、隔離された。耶蘇という言葉は伝染病か病気を意味した。そしてキリスト教はあたかもコレラに感染するかのように忌み嫌われた。”¹⁵ 次のよううわささえあった。“その学校へ通うものは、クロロフォルムを嗅がされ、バスケットのようなものの中に放り込まれて刺し殺される。”¹⁶

学校

そのような学校の一つが 1885 年に長老教会派の Mary Hesser によって金沢に設立された金沢女子校であった。かつての生徒たちの回想録を読めば、宣教師たちが成功したかどうかについてはわかるだろう。

当時石川県の小学校の女子生徒の就学率は 21 % にすぎなかった。¹⁷

金沢女子校も、当初は 4, 5 人の生徒数だったが、これはすぐに 25 名にまで増えた。¹⁸ しかし、たった 6 室だけでは、すべての女生徒がすぐに寄宿生活をするのは無理であった。しかし、後に改善がなされこれが可能になった。¹⁹

学校での多くの授業は英語で行われた。そして使用された教科書の多くはアメリカから輸入された。中国文学や日本語を教えるために一部の教員は日本人であったが、生徒たちが時折“アメリカのハイスクールやカレッジのようだと感じるほどの数の授業が英語で行われた。”²⁰

多くの生徒たちが思い起こすのは英語自体や地理、歴史、哲学、科学を英語で学ぶがかなり困難であったということである。そしてこれはその学校に入学した生徒の数と比較するとほとんどの生徒が卒業できなかったという事実で反映されている。²¹

もちろん、多くの生徒たちはキリスト教の学習より、西洋文化や科学技術の学習に興味をもったであろう。宣教師たちはそのような科目の相互関係にも配慮をしていた。さらに、宣教師たちの意図に反して、多くの生徒たちはお互いの理解がうまくいかないことがあったことも回想している。ある生徒は外国人の教師が教えようとしたことをしばしば理解できず、教師側でも生徒たちを理

解できなかったことを覚えている。²²

当初から、時間を守るということが、その学校の特徴であった。

“寄宿生たちは土曜日は午前 10 時に外出を許されたが、迎えに来るものがいなければ、外出はできなかった。午前 5 時に寄宿生たちは順番に鐘をならした。5 分でも遅れようものなら罰として外出は禁止された。さらに、ある朝、ハクジョウという生徒が寝とぼけて時間を間違えた。彼女は午前 3 時に鐘をガーン、ガーンと鳴らしてしまったのだ。夜明けを待つまでもなく、彼女はミス・ヘッサーに呼ばれ、叱責をうけた。

また食堂に入るためには 5 分と 2 秒鐘をならした鳴らしたし、5 分 5 秒で教室間の移動しなければならなかった。それほど厳格に時間を守ることは厄介なことであった。入浴は 20 分間であり、時計を持って風呂にはいらねばならなかった。”²³

宣教師たちはまた別に 19 世紀に流行した体操を導入した。

業後 30 分の間、寄宿たちの体操時間であった。どの生徒も校舎への居残りは許されず、彼らは皆、庭へ集合した。遅れれば、“体操です、皆さん！”²⁴ という怒鳴り声に追い立てられることになった。そのような西洋風の習慣は目新しかったので、好奇心に満ちた野次馬が見物のために学校周辺にあつまった。²⁵

その学校のさらなる特徴は、礼拝であった。それは朝の聖書の講読、集会からはじまり、食事の前の神への祈り、そして夕方の祈りへと続くのである。²⁶ 加えて、聖書はまた、道徳の授業の教科書として使われた。それは 1892 年に、当局によって学校時間中に聖書を使う許可が取り消されるまで続いた。²⁷

また別な儀式が導入されたが、それはアメリカの家庭生活の理想を体現するための“食事の時間”であった。

“寄宿生たちは午前 5 時から 6 時の間に起きねばなりませんでした。6 時半には井上さんの食事の準備を手伝い、その後朝食をとりました。先生が食事の前に祝福の言葉を述べ、それから、皆で唱和しました。私たちは箸をとり、先生たちは新聞の主な記事を私たちに読み聞かせました。そうして食事の 30 分は過ぎて行っただけです。”²⁸

このような教育のある面は西洋では良く知られたものである。食事の前の祈りの言葉、家族でテーブルを囲んで出来事について“議論する”などは。しかし、箸などの日本文化の一面が入り込むのは不可避であった。それにも関わらず、宣教師たちの意図は明瞭であった。

家庭と家族

宣教師たちは日本の“家”制度という欠陥に満ちた概

念の代わりとして、アメリカのプロテスタントの“家”という概念を作り上げたかったのである。

“それは日本が近代へ現われる前の、支配層であった武士の家族の、古い、家の制度であった。本家と分家の複雑な家計図を備え、家長の下に統率され、息子たちの長幼の関係の上に組み上げられたものなのである。”²⁹

宣教師たちが女子寄宿学校に思い描いた“家庭”や“家族”の原形は Mount Holyoke Seminary の Mary Lyon によって作り上げられたものである。“（それは）教師と生徒を‘家族’として組織し、彼らは、勉学や、祈りや、仕事、休息にふさわしい設備を整えた、一般住居のようにデザインされた建物に暮らした”³⁰ 宣教師たちにとって土地の人々の家にくらべれば、そのような家は明らかにすぐれているということは自明のことであった。ある宣教師は書いている。“日本人は我々の家庭生活に特別の好奇心をしめす。彼らは我々を、注目に値し、好ましいものであると見ている。かれら自身の家庭にはそのようなものがしばしば欠けているので、なをさら、好ましいものだという印象をもつのである。”³¹

1880年代に home という言葉は“ホーム”という外来語として日本語に導入された。

“The Meiji School for Women の学長であり、1885年に設立された、日本の最初の大手の雑誌である女学雑誌の編集者でもあった岩本義春は、プロテスタントの理想的家庭の一番の代弁者であり、”発見”や”普及”という英語の言葉の誇り高き提唱者であった。岩本は日本の家庭の中に調和やよろこびがないのは養子制度や、1軒の家に義理の両親、その他の義理の親戚、愛人、下宿人が同居しており、それぞれが結婚生活を営んでいるので、そのことが子供たちにとってひどい環境となっているのだった。”³²

いままで見てきたように、時間厳守や、指定された家庭的な義務やキリスト教の儀式どのような日常的な作業に集中することで、金沢女子学校のような女子学校は近代のキリスト教の家庭や学校の理想を持ち込もうとしたのである。本来の理想とのひとつの明らかな違いは“父親”の存在がないということである。未婚の女性宣教師が“母親”や“姉”の代役を務めたのだ。これは擬似的な家庭環境であった。そこでは Mary Hesser のような女

性が独身を通し、従来の家庭生活の恩恵をまだ受けることができたのである。さらに日本人の生徒たちは他の生徒との姉妹関係についてしばしば述べている。

金沢では、Mary Hesser はかなり厳しい“母親”として見られていたようだ。彼女に対する典型的なコメントは彼女の教え方が“親切で、厳しかった”³³ というものである。また彼女は“めったに笑わなかったし”そして“腹を立てると靴で床をたたいたものだった”³⁴ 彼女のやさしさについての数少ない記録があるが、これは主に、生徒や生徒の家族が病気の時に、その家庭を訪問した時のものである。しかし、ある生徒は、Hesser がすべての女生徒が天然痘の予防接種を受けるべきだと主張したときのことを覚えている。彼女は自分のあばたの顔を指差して、“こんな風になってしまっただけではないでしょう。”と彼らに言った。³⁵ 我々はこのように Mary Hesser の実像をかいま見ることができるが、理想的なキリスト教の母親像であらねばならないという彼女の気持ちがあきらかに緊張を彼女に強いたに違いなかった。

結論

この時期日本で活動していたプロテスタントの宣教師たちが“教育”と“キリスト教寄宿舎学校の生活”とをほとんど区別しなかったのは特に驚くようなことではない。

Tacco は述べている。“19世紀の後半、プロテスタントの道徳はアメリカ文化の基幹部分であった。そして、多くの地域でそのような学校は地域の社会道徳の道具として、教会にとってかわっていた。”³⁶

宣教師たちは期待していた。彼らのキリスト教の家庭像が日本の少女たちを彼女たち自身の文化から“救い出し”そして、日本人一般に採用され、社会全般の改善につながることを。

皮肉にも、Sand が指摘しているように、home という概念は日本語の“家庭”（文字通りには家と庭であるが）という言葉の形で日本文化のなかに入り込んだが、それが包含する意味の多く—特にキリスト教的な意味合い—は失われてしまった。³⁷ ところが一方、女性の教育に関する限りは、宣教師たちが設立した学校—特に女学校—はたいいてい成功し、いまだに多くが金沢女学校〔現北陸学院大学〕のように今日まで存在している。³⁸

Notes

This essay was originally published in the Japan Association for Comparative Cultures journal *Studies in Comparative Culture* in August, 2007.

この小論は、最初、日本比較文化学会の学会誌「比較文化研究」の2007年8月号に発表したものである。

1. Griffis. W. E., *The Mikardo's Empire*. (Vol. 2) New York: Harper, 1876, p.552.
「皇国」アメリカ古典文庫 22, 研究社 (川西進訳)
2. Griffis. W. E., "Letter to Margaret C. Griffis." Cited in Rosenstone, R., *Mirror in the Shrine*. Cambridge: Harvard Univ. Press, 1988, p.99
Griffis. W. E., "Letter to Margaret C. Griffis." (Rosenstone, R., *Mirror in the Shrine*. Cambridge: Harvard Univ. Press, 1988, p.99 に引用)
3. Griffis. *The Mikardo's Empire*. p.551.
「皇国」アメリカ古典文庫 22, 研究社 (川西進訳)
4. Griffis. *The Mikardo's Empire*. p.555.
「皇国」アメリカ古典文庫 22, 研究社 (川西進訳)
5. Griffis. *The Mikardo's Empire*. p.555.
「皇国」アメリカ古典文庫 22, 研究社 (川西進訳)
6. Bacon. M. B., *Japanese Girls and Women*. New York: Kagan Paul, p.178. As Ueno has pointed out, "Calling this a tradition was not entirely false since it was a tradition which belonged to the dominant class."
Bacon. M. B., *Japanese Girls and Women*. New York: Kagan Paul, p.178.
上野は指摘している。「これをある種の伝統と呼ぶのは全くまちがいのわけではなかった。支配階級の間では伝統となっていたからである。」
7. Ueno. C., "Modern Patriarchy and the Formation of the Japanese Nation State." in Denoon. D., (Ed.) *Multicultural Japan: palaeolithic to postmodern*. Cambridge; Cambridge Univ. Press, 1996, p.216.
8. Griffis. W. E., "letter to Margaret Griffis (June 26, 1871)" cited in Rosenstone. R., p.95.
Griffis. W. E., "Letter to Margaret C. Griffis." (Rosenstone, R., *Mirror in the Shrine*. Cambridge: Harvard Univ. Press, 1988, p.95 に引用)
9. Tokuzo. Akiko, *The Rise of the Feminist Movement in Japan* 1999, Tokyo Kaio p.41
徳座 晃子「**The Rise of the Feminist Movement in Japan** [日本婦人運動小史—奥むめおを中心として]」慶應義塾大学出版会; English版 (1999/04)
- 10.11. There is considerable doubt about how strictly Confucianism was enforced. In *Japan Through American Eyes 1859-1866*, Francis Hall says "Among the learned and the better classes the system of Confucius professedly obtains, as it does in China among the Mandarins and scholars, but in reality there is a disbelief in all these forms." p.90.
どの程度、厳密に儒教の教えが実行されたかは疑わしい。
「*Japan Through American Eyes 1859-1866*」においてフランシス・ホールは次のように述べている。「学識のある人々

や上位の階級の人々の間では、儒教は表面上は広くいきわたっているように見えるが、中国の高級官僚や学者たちと同様に、実際は信じられていない。

Ueno. C., "Modern Patriarchy in the Formation of the Japanese Nation State" in *Multicultural Japan: Paleolithic to Postmodern 1996* p.215

12. Masao, Miyoshi. *As We Saw Them*, p.76
As We Saw Them: The First Japanese Embassy To The United States (ペーパーバック) Carol Gluck (はしがき), Masao Miyoshi (著)
13. Tocco. Martha, *School Bound: Women's Higher Education in Nineteenth-Century Japan*. Stanford University Phd. thesis, 1995, p.80
14. Rohlen T., *Japan's High Schools* Berkley. Univ. of California Press, 1983, p.59
15. Genshiro, Koriyama. in *Thomas Clay Winn: The life of an American Missionary in Early Modern Japan* p.65
16. 「北陸学院百年史」 植沢 p.227
17. Umezawa. Toshio, *Meri-Hesseru no Shougai*. p.20
梅沢 俊夫? 「女子教育の先駆者 メリー・ヘッセルの生涯」北陸学院短期大学 2001 p.20
18. 北陸学院 100 年史編集委員会編「北陸学院 100 年の歩み」北陸学院, 1985, p.9.
19. 北陸学院 100 年史編集委員会編「北陸学院 100 年の歩み」北陸学院, 1985, p.9
20. Genshiro, Koriyama. at the boy's school set up by the missionaries, in Nakagawa. Shoshichi, *Nihon no Shitou: Tomasu Uin Den*. Tokyo: Shinkyu, 1952, p.68.
21. 例えば、1885 年から 1899 年の 557 名の入学者の内で卒業できた者は 47 名のみであった。
北陸学院 100 年史編集委員会編「北陸学院 100 年の歩み」北陸学院, 1985, p.28
22. 「ミッションの森」北国新聞 (夕刊) 1982 年 1 月
23. 北陸女学校同窓会編「會報 17 号」1926, 金沢 p. 21.
24. 北陸学院八十年誌編纂委員編「北陸学院八十年誌」北陸学院, 1966, p.28
25. 北陸女学校同窓会編「會報 17 号」1926 p. 21.
26. 北陸学院百年史編集委員会編「北陸学院百年史」北陸学院, 1990 p.1-219
27. 北陸学院百年史編集委員会編「北陸学院百年史」北陸学院, 1990 p.63
28. 北陸学院八十年誌編纂委員編「北陸学院八十年誌」北陸学院, 1966, p.28
29. Cutts. R. L., *An Empire of Schools: Japanese Universities and the Molding of a National Power Elite*. New York: East Gate, 1996, p.133.
30. Kilson M., *Mary Forbes Greene: Mother of the Japan Mission*. Lampeter: Edwin Mellen Press, 1991, p.15.
31. Elizer, Winn. in Winn T. "Letter to the Missionary Board." (Jan. 10, 1896) in Suzuki, S. (Ed.) *The Letters of Thomas Clay Winn (1878-1908)*. Kanazawa. Hokuriku Gakuin. 1985, p.172.
32. Sand. J., "At Home in the Meiji Period." In Vlastos. S., (Ed.) *Mirror of Modernity: invented traditions of modern Japan*. Berkley: Univ. of California Press, 1998, p.193.
33. 北陸女学校同窓会編「會報 17 号」1926 p. 21.
34. 北陸女学校同窓会編「會報 17 号」1926 p. 21.

35. 北陸女学校同窓會編「會報 17号」1926 p. 23.
36. Tocco. M., *School Bound* p.63.
37. Sand. J., p.196.
38. 現在,「北陸学院女子短期大学」の名称で存続している

Bibliography.

参考文献一覧

- Bacon. Alice Mabel, *Japanese Girls and Women*. New York: Kegan Paul, 1891.
- Barr. Pat, *The Coming of The Barbarians*. Suffolk, Penguin. 1967
- Cutts. Robert, *An Empire of School: Japan's universities and the molding of national power*. New York: East Gate. 1996.
- Editorial Committee for the History of Hokuriku Gakuin's First 80 Years. *Hokuriku Gakuin 80nen Shi*. Kanazawa: Hokuriku Gakuin, 1966.
- 北陸学院八十年誌編集委員編「北陸学院八十年誌」北陸学院, 1966
- Editorial Committee for the History of Hokuriku Gakuin's First 100 Years. *Hokuriku Gakuin 100nen Shi*. Kanazawa: Hokoku Shinbunsha, 1990.
- 北陸学院百年史編集委員会編「北陸学院百年史」北陸学院, 1990
- 北陸学院 100 年史編集委員会編「北陸学院 100 年の歩み」北陸学院, 1985
- Griffis. William Elliot, *The Mikardo's Empire* (Vol. 2) New York: Harper, 1876.
- Hall. Francis, *Japan Through American Eyes 1859-1866*. Colorado, Westview, 2001
- Kellerher. D, and Sloss. C., "American Presbyterian Missionaries in Meiji Japan: Thomas Winn a Reluctant Educator" Institute of Human Science Kanazawa College of Economics, *Telos* vol 32, March 2002.
- Kilson. Marion, *Mary Jane Forbes Greene: Mother of the Japan Mission* Lampeter: Edwin Mellen Press, 1991.
- Mission no Mori*. Newspaper clippings material available at the Hesser Library, Hokuriku Gakuin Women's Junior University.
- 「ミッシヨンの森」北國新聞 (夕刊) 1982 年 1 月
- Miyoshi, Masao. *As We Saw Them* Kodansha, 1994
- Morris-Suzuki. Tessa, *Reinventing Japan: time, space, nation* New York: East Gate, 1998.
- Nakagawa. Shoshichi, *Nihon no Shitou: Tomasu Uin Den*. Tokyo: Shinkyu, 1952.
- 中沢 正七編「日本の使徒 トーマス・ウィン伝」新書, ウィン渡日 90 周年記念会, 1967
- Rohlen. Thomas, *Japan's High Schools*. Berkley: Univ. of California Press, 1983.
- Rosenstone. Robert, *Mirror in the Shrine: American Encounters in Meiji Japan*. Cambridge: Univ. of Harvard Press, 1988.
- Sand. Jordan, "At home in the Meiji Period: Inventing Japanese Domesticity."
- Sloss. Colin. "Middle School Education in Early Meiji Period Kanazawa and "Modern Protestant College Education Based on English." In the *Journal of Kanazawa Seryo University*. (Vol. 37) Society of Economics Kanazawa Seiryō University, 2003.
- In Vlastos. Stephen, *Mirror of Modernity: invented traditions of modern Japan*. Berkley: Univ. of California Press, 1998.
- Tocco. Martha Caroline, *School Bound: Women's Higher Education in Nineteenth Century Japan*. Stanford Univ. PhD. Thesis, 1995.
- Tokuza. Akiko, *The Rise of the Feminist Movement in Japan*. Tokyo: Keio Univ. Press, 1999.
- The Rise of the Feminist Movement in Japan (1999/04)
- Ueno. Chizuko, "Modern Patriarchy and the Formation of the Japanese Nation State. In Dennon. Donald, (Ed.) *Multicultural Japan: palaeolithic to postmodern*. Cambridge. Cambridge Univ. Press, 1996.
- 梅染 信夫「女子教育の先駆者 メリー・ヘッセルの生涯」北陸学院短期大学 2001
- Winn. Thomas Clay, *The Letters of Thomas Clay Winn 1878-1908* Suzuki. Susumu, (Ed.) Kanazawa: Hokuriku Gakuin, 1985.